

自己の生き方を見つめ、主体的に実践していこうとする児童の育成 ～ 心に響く道徳の時間の指導の工夫を中心にして ～

目 次

I	研究の概要	5	1
1	研究主題	5	1
2	主題設定の理由	5	1
3	研究の目的	5	2
4	研究の仮説	5	2
5	研究の全体構想	5	2
6	研究の経過	5	3
II	研究の実際	5	3
1	研究の基本的な考え方	5	3
(1)	「自己の生き方を見つめる」とは	5	3
(2)	「主体的に実践していこうとする」とは	5	3
2	実践につながる道徳教育	5	4
(1)	児童が実践に移すための過程の仕組み	5	4
(2)	体験や体験活動を生かした、児童の心に響く道徳の時間の指導や評価の工夫	5	5
3	授業実践による検証の分析と考察	5	8
(1)	本研究で取り扱う内容項目	5	8
(2)	第1回検証授業	5	10
(3)	第2回検証授業	5	13
(4)	第1回検証授業と第2回検証授業を比較した児童の変容の分析と考察	5	16
4	各教科等との関連	5	19
5	家庭との連携	5	20
III	研究の成果と課題	5	20
1	成果	5	20
2	課題	5	20
	〈参考文献〉	5	20

I 研究の概要

1 研究主題

自己の生き方を見つめ、主体的に実践していこうとする児童の育成 ～心に響く道徳の時間の指導の工夫を中心にして～

2 主題設定の理由

今日の社会は、情報化、少子高齢化、価値観の多様化等が進み、子どもたちを取り巻く環境は急激に変化し続けている。この変化の影響を受け、社会規範自体が揺らぐ社会の大きな変化や家庭・地域の教育力の低下、異年齢の子どもどうしの交流の場の減少及び社会体験・自然体験の不足等が問題となってきた。その結果、生命尊重の精神や自尊感情を高めることが難しく、基本的な生活習慣の定着、規範意識、人間関係を築く力や集団活動を通じた社会性の育成等、子どもたちの課題も浮き彫りになってきている。これらの課題解決に向けて、子どもたちに「生きる力」を身に付けさせていくことが必要であり、その理念は新学習指導要領にも示してある。学校教育では、体験活動を生かして、人間としてよりよく生きる自己実現のできる自分を感じさせ、主体的に判断して実践していこうとする意欲を育てる教育が必要であり、道徳教育の充実が一層求められている。

このような背景を受け、平成20年3月に公示された新学習指導要領では、その改訂の柱の一つとして、「道徳教育の充実」が掲げられている。総則には、道徳教育は、道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行うことが明確化されている。

本県の教育創造プラン「宮崎ならではの教育」では、心の教育の充実を図るために、人間としての在り方や生き方の自覚を深めるとともに、美しいものや善い行いなどとの出会いにおいて、素直に感動する心を育むことが重要であるととらえている。そのための施策として、道徳教育の充実を推進し、道徳の時間の指導の充実や豊かな体験活動の充実等を展開している。また、「第2期 明日の宮崎を担う子どもたちを育む戦略プロジェクト」では、戦略4に「命を大切にする教育の推進」が位置付けてあり、道徳教育の充実を図る施策を推進している。自己を見つめ、自己の生き方を見直し、よりよく生きていこうとする子どもを育成する道徳教育は、これからの教育に必要不可欠なものであると考える。

研究実践校である都城市立志和池小学校のある志和池地区は、平成20年に学校支援地域本部事業の指定を受け、学力向上や豊かな体験活動の推進に取り組んできた。道徳の時間においては、保護者や地域人材の活用、参観日の授業の公開等、道徳の時間の指導の工夫・改善を行ってきた。児童の日記や作文、ボランティア活動等の日常活動を見ると、道徳的心情の高まりについて、児童の変容が見られる。しかし、保護者のアンケート結果を見ると、思いやり・親切、誠実・明朗、生命尊重について、まだまだ実践力は高まっていないという意見が多かった。

そこで、本主題を、「自己の生き方を見つめ、主体的に実践していこうとする児童の育成」、副題を「心に響く道徳の時間の指導の工夫を中心にして」と設定した。道徳の時間に深めた道徳的価値を通して自分自身のよさや課題に気づき、自己の生き方を見つめ、日常生活において、主体的に実践していこうとする道徳的実践力のある児童の育成を目指したい。本研究では、児童が実践に移すための過程や実践意欲を高める評価について整理し、体験や体験活動を生かした心に響く道徳の時間の工夫を中心に、道徳的実践力を高めていく。ここでは、児童の意識調

査や記述物、教師の観察等とともに、心理尺度を用いた客観的な評価も取り入れ、多面的・総合的に研究の評価を行い、指導に生かしていきたい。このように、実践につながる道德教育について明らかにし、児童の心に響く道德の時間の工夫をしていけば、主体的に実践していこうとする児童の育成につながるのではないかと考え、本主題を設定した。

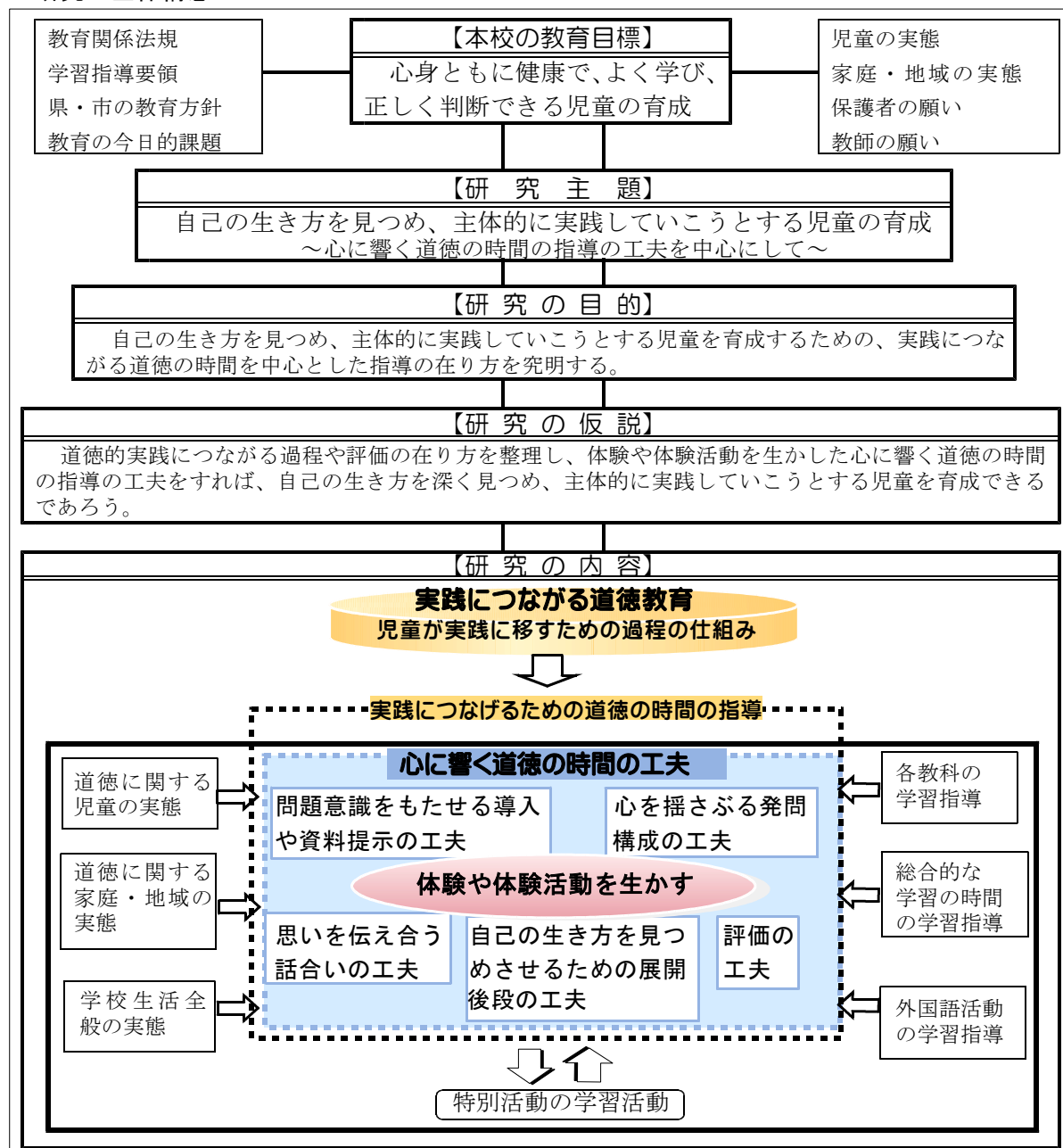
3 研究の目的

自己の生き方を見つめ、主体的に実践していこうとする児童を育成するための、実践につながる道德の時間を中心とした指導の在り方を究明する。

4 研究の仮説

道德的实践につながる過程や評価の在り方を整理し、体験や体験活動を生かした心に響く道德の時間の指導の工夫をすれば、自己の生き方を深く見つめ、主体的に実践していこうとする児童を育成できるであろう。

5 研究の全体構想



6 研究の経過

月	研 究 内 容	備 考
4	基礎理論研究、研究の方向性の検討、研究計画の立案	
5	理論研究、研究概要の決定、意識調査及び実態調査	志和池小学校
6	理論研究、意識調査及び実態調査の分析、検証授業Ⅰの準備	
7	検証授業Ⅰの実施、検証授業Ⅰの分析と考察	志和池小学校
8	理論研究、研究の中間まとめ、中間発表会	
9	検証授業Ⅱの準備、意識調査及び実態調査の実施と分析	志和池小学校
10	検証授業Ⅱの実施、検証授業Ⅱの分析と考察	志和池小学校
11	研究状況のまとめ、研究状況説明会	
12	研究のまとめ、研究報告書作成	
1	研究のまとめ、研究報告書作成、研究発表準備	
2	研究のまとめ、研究発表準備	
3	研究発表会	

Ⅱ 研究の実際

1 研究の基本的な考え方

(1) 「自己の生き方を見つめる」とは

道徳教育は、児童が自己を見つめ、自分という人間の在り方や生き方を正面から見つめて、自分で自分を律する、つまり、自律的な態度や行為がとれる人間形成をしていくことを目指している。

この道徳教育は、他教科等や日常の指導等の教育活動全体を通じて、適切に行われなければならない。特に、その要となる道徳の時間については、新学習指導要領の目標に、「道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考えを深める」ことが明記されている。これは、資料を通して、人間理解や他者理解を深めながら、道徳的価値について理解し、それを「自己を見つめる視点」として自分との関わりでとらえて振り返ることにより、自分なりに目指す生き方を模索し培っていくことである。以上のことから、「自己の生き方を見つめる」とは、授業の中で高められた道徳的価値価値観を「自己を見つめる視点」とし、それを基に、よりよくなろうと肯定的に、これからの自己の在り方や目標を意識していることととらえる。

(2) 「主体的に実践していこうとする」とは

「主体的」とは、自分の意志や判断で行動することととらえる。「実践する」ということは、道徳の時間で深められた自己の生き方を、日常の様々な場面で、適切な行為を選択し、進んで実践に移すような児童の姿を意味している。以上のことから、「主体的に実践していこうとする」とは、道徳の時間に自己の生き方を見つめた児童が、学校・家庭・地域におけるあらゆる場面において、児童自らの意志や判断で適切な行為に移そうとしていること、ととらえる。これは、一時的なものではなく、持続的な作用を及ぼすものであり、実践が日常化されるには、長期的な展望も考えられる。

道徳の時間に、実践に結びつくための自発的な意志を育てるためには、心に響く道徳の時

間の指導を充実させていくことが大切である。

2 実践につながる道德教育

道德教育は、学校の教育活動全体を通して道德性を育成することを目指している。最終的には、道德の時間に高められた道德的実践力が道德的实践として表れることである。これが、実践につながる道德教育となる。そこで、児童が実践に移すための過程の仕組みを、教育開発研究所出版の『道德的体験と行為』（瀬戸真 編著）から、以下のようにまとめ、それをもとに、道德的実践を支える道德的実践力を高めていく道德の時間の指導について整理した。

(1) 児童が実践に移すための過程の仕組み

ア 動機と発達の段階

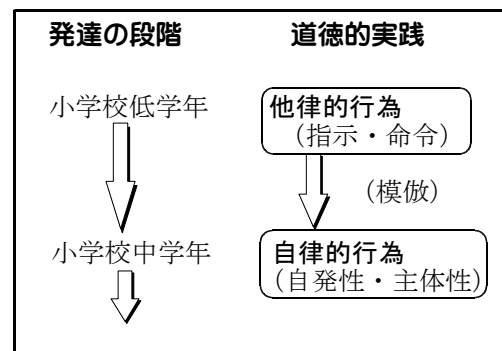
道德的実践は、内面的資質としての道德的実践力によって決断され、行われるものである。児童の内面を育てるためには、行為に至るまでの「動機」とそのときの児童の「発達の段階」が大きく関係している。

まず、その行為が自己の中から発生する「内発的動機」であるかどうかが重要である。しかし、児童の日常生活では、外側から引き起こされる「外発的動機」による行為の場面が多い。主体的に実践していくためには、道德的価値を行為に表すための「内発的動機」に目を向けて指導をしていくことが望まれる。

道德的実践は、児童の発達の段階とも関係がある。（資料1）他律的行為は、指示や命令によるもので、その行為の意味や効果を十分理解しないまま行っている場合が多い。一方、自律的行為は、自発性・主体性によるもので、その行為は自分の責任において行っているものである。また、中間的な行為としての模倣もある。

小学校低学年の時期までは、指導・教え込み・習慣づけのように他律的に教え込むことを必要とする段階と考える。児童が行為を模倣することにより、児童自身が望ましい行為を体験的に知り、行為の型を身に付けていくと考えられる。

小学校中学年頃からは、自我が芽生え、自分で判断をすることを望むようになる。児童が内発的動機により、自分の行為を自己責任の下に判断する自律的行為をとるような指導が効果的となる。



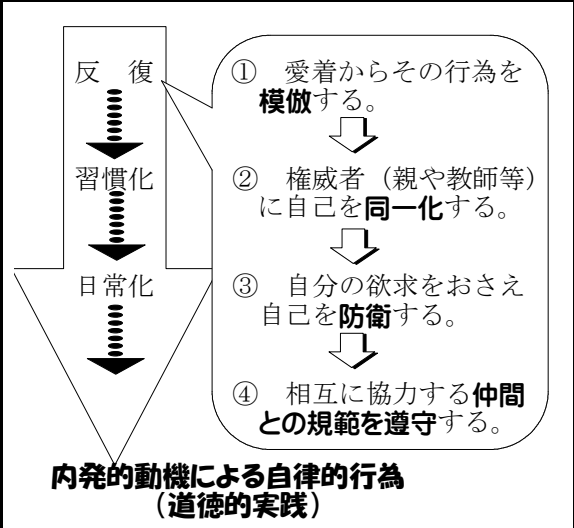
【資料1 発達の段階と道德的行為】

イ 道德的価値を内面化し道德的実践に移す過程

人が道德的価値を内面化し、道德的実践として表れるまでには、資料2のような過程が考えられる。まず、慣れ親しんでいる親や他者への愛着からその行為を模倣し道德的価値を内面化し、実践に移す。次に、親や教師等の児童にとって権威となる者に自己を同一化する。これは、自分の欲求を抑え、自己を防衛することになる。さらに、友だちや仲間という集団の中での関係が強くなると、目的を達成するために、相互に協力する仲間との規範を遵守するようになり、道德的価値を内面化し、自律的行為に移す。このような流れで、自律的行為が反復、習慣化、日常化を経ることによって、無意識のうちに実践に移すようになる。この

ことが、さらに習慣化、日常化されると、自然に「内発的動機による自律的行為」が行われるようになる。このことが、道徳的实践に移す過程であると考えられる。

小学校高学年からは、仲間との規範の遵守による実践も多くなる。そのため、児童の実態を的確に把握し、学級を中心とした集団の中で、お互いにじっくりと考えを深めさせていく話合いの場面を意図的に設定することが必要になってくる。話合いを通して、児童が道徳的实践のよさを実感できるようにしていくことが大切である。



【資料 2 道徳的实践に移す過程】

(2) 体験や体験活動を生かした、児童の心に響く道徳の時間の指導や評価の工夫

児童が道徳的实践に移そうとするためには、道徳の時間の指導を充実させ、道徳的实践意欲や態度を育てることを意識して指導することが必要となる。そのために、道徳の時間は、児童の体験の中の行為に目を向けさせて考えさせることが効果的だと考える。その行為が自分の意志や判断で行おうとする内発的動機による自律的行為かどうかをじっくり考えさせることが、道徳的实践力を高めることにつながっていく。その際、授業で扱う道徳的価値について、自分自身で納得して価値把握をしているかが重要になる。

そこで、体験や体験活動を取り入れた、児童の心に響く道徳の時間の指導を工夫していく。児童の日常における体験や学校における体験活動を道徳の時間に生かし、児童が道徳的価値を心から納得する授業を行えば、自分の意志や判断で道徳的实践に移そうとする意識が育っていくと考える。

ア 体験や体験活動を生かす工夫

人は、自然や社会、人々との関わりの中で、様々な体験を通して道徳的価値について考えたり感じたりしている。この体験を道徳の時間に意識させ、自分の心と向き合わせることで、そこにある道徳的価値についてじっくり考えさせることができる。体験を基に考えさせたり、体験と重ね合わせて考えさせたりすることは、そのときの心情や判断基準を明らかにすることへとつながる。児童の道徳的価値に対する実態に応じて、資料 3 に示すように、

体験や体験活動を生かす工夫		
導入	価値への方向付け	各教科等の学習活動や生活場面等の振り返り (体験)
展開前段	価値追求 価値把握	体験が意識できる発問 (体験)
		役割演技、模擬体験等 (体験活動)
展開後段	価値の自覚	自分の日常生活における行為や心情等の振り返り (体験)
終末	実践意欲	実践意欲を高める説話等 (体験)

【資料 3 体験や体験活動を生かす工夫】

各段階において体験や体験活動を生かす工夫をしていくことにした。体験の振り返りを繰り返すことにより、道徳的価値が高まっていき、道徳的行為につながっていくと考える。

イ 児童の心に響く道徳の時間の指導の工夫

道徳の時間が、児童の心に響くものであれば、児童が主体的に実践していこうとすると考える。心に響く道徳の時間とは、児童の感性が揺り動かされたり児童の心に訴えるものがあつたりする授業ととらえる。心から納得できると、自分の意志や判断で行為に移そうとする意識へとつながる。心に響く道徳の時間の指導の工夫について資料4に示す。

また、実践につながるための道徳の時間は、児童自らが求め、主体的に学習していくことが望まれる。児童の意識の広がりについて、資料5に示す。導入で問題意識をしっかりとらせ、展開前段で価値について児童が納得するような授業を行えば、実践につながる展開後段が活きてくる。展開後段を重点的に扱うことにより、実践に移そうという意識が徐々に高まっていくと考える。そこで、展開後段に話し合いを位置付ける。まずは高められた価値を「自己を見つめる視点」とし、その行為やその時の気持ち及びそれに至った理由について考えさせ、小グループでの話し合いを通して、自己の生き方を見つめさせていく。

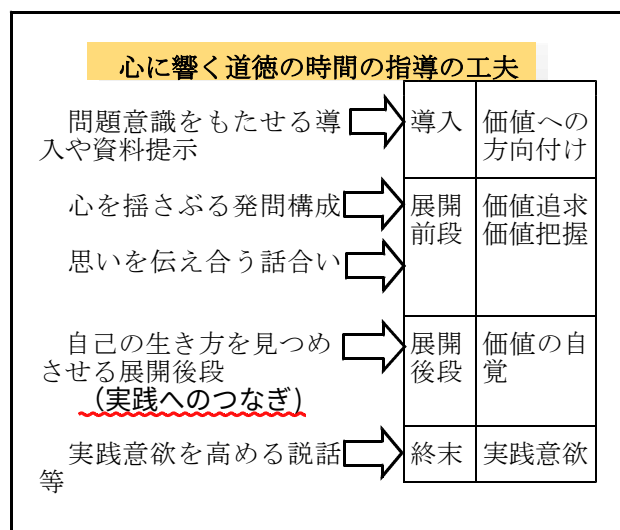
以上のことから、心に響く道徳の時間の指導の工夫について、具体的な手立てを述べていく。

(7) 問題意識をもたせる導入や資料提示の工夫

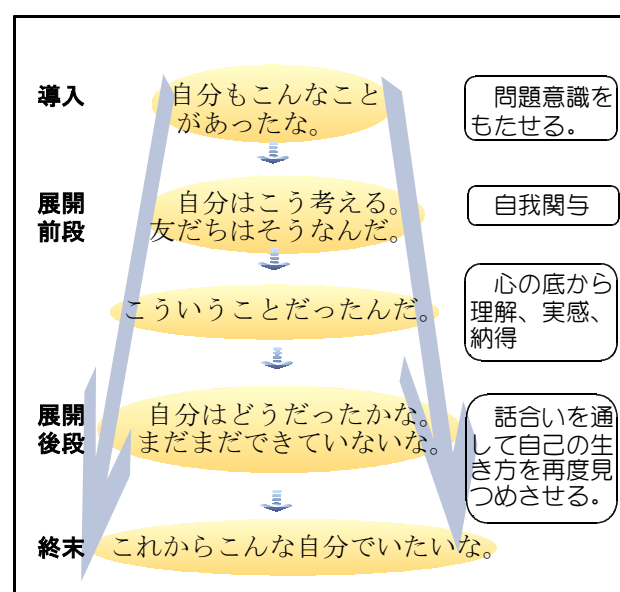
実践につながる道徳の時間は、内発的な動機を促すものでなければならない。児童自ら考えたいと思うような導入や資料提示をすることにより、児童の気持ちを高めたりねらいとする価値への方向付けをしたりすることができると考える。導入の工夫については、各教科等との関連を図ったり、日常の生活場面の体験を生かしたりしていく。資料提示の工夫については、児童が資料の内容に浸れるように、臨場感のある読み方や効果音、写真や映像、資料に関わる道具類を準備していく。このような提示の工夫を児童の実態も考慮して行っていくことにした。

(4) 心を揺さぶる発問構成の工夫

児童が今までもってきた価値観を、児童の心を揺さぶる発問によって、多様な感じ方や考え方を引き出すことが、価値の把握につながる。心を揺さぶるとは、感動する話の展開や登



【資料4 心に響く道徳の時間の指導の工夫】



【資料5 道徳の時間の児童の意識の広がり】

場人物の心の葛藤により、その価値の深さについて考えさせていくことととらえる。これは、中心発問だけで成り立つとは限らないので、その布石となる基本発問や掘り下げる補助発問との構成によって、心を揺さぶり、児童の判断の基になっている経験や価値観を引き出すことにした。発問構成の手順について、資料6に示す。

- ① 授業のねらいに基づき、最も考えさせたい場面に中心発問を設定する。
- ② 中心発問の前に、その布石となる基本発問を設定する。
- ③ 児童の思考の流れを想定し、さらに考えを深めさせるために、補助発問を設定する。
「揺さぶり」の補助発問→児童の考えに対してちがう考えを出す。
「切りかえし」の補助発問→児童の考えに対して深く理由や根拠を問う。

【資料6 発問構成の手順】

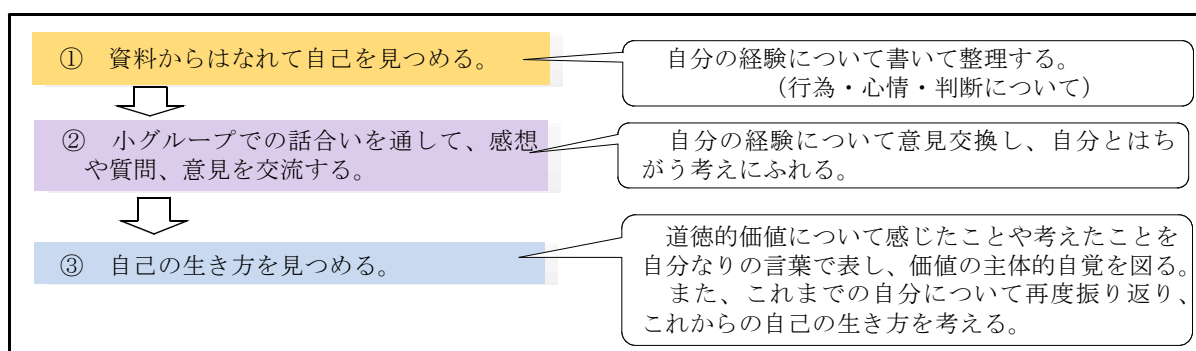
(ウ) 思いを伝え合う話合いの工夫

話合いを取り入れることは、自分の思いや考えを他者と比較することにより、自分の考えとの類似点や相違点を明らかにし、共に学び合う中で、登場人物に自我関与することにつながる。そのことは、自分の経験を振り返らせ、相互に考えを深め合い、自己の生き方を見つめさせることにもつながっていく。話合いの中で自分の思いを伝えるためには、話す内容を整理しまとめる力が必要となる。しかし、授業の話合いでは自分の考えたことをじっくりまとめる時間をとるのは難しい。そこで、中心発問について話合いでは、書く活動を取り入れ、自分の心の中をありのままに書き出させてから考えを整理させた。その上で、相互指名による児童どうしの主体的な話合いの場を設けることで、共に学び合いながら価値についての把握ができるようにした。

(エ) 自己の生き方を見つめさせるための展開後段の工夫

展開後段は、展開前段に資料を通して追及・把握した道徳的価値に照らして、今までの自分を見つめ、よりよい生き方を内面から自覚する段階である。しかし、実践につなげるために重要な展開後段に入ると、児童の集中力が切れてしまったり自分の経験について考えることが進まなかったりすることが多い。

そこで、展開後段では、「自己を見つめる」→「小グループでの話合い」→「自己の生き方を見つめる」という流れを位置付ける。具体的には資料7に示す流れで学習を進めていく。



【資料7 自己の生き方を見つめさせるための展開後段の流れ】

まず、自分の経験について、その行為とその時の心情や判断の基準になった考え方について書きながら整理させる。次に、書いたものを意見交換し、それぞれについて感想や意見、質問の交流をすることにより、自分とはちがう考えにもふれさせる。最後に、話合いを通して、感じたことや考えたことを書かせることにより、道徳的価値の主体的自覚を図り、自己の生き方をじっくり見つめ、より道徳的実践へとつながるような学習の流れにした。

(オ) 評価の工夫

a 評価の考え方

道德教育における評価は、児童とのふれあいを通して共感的に理解し、多面的・総合的にとらえていくことが基本である。そこで、道德の時間に、道德的価値の主體的自覚を深め、自己の生き方をより深く見つめさせて、児童の意識の変容を把握しなければならない。これまで道德の時間は、「道德的心情」と「道德的判断力」をねらう授業が多かったが、本研究では「実践につながるための道德の時間」を目指しているので、「道德的実践意欲と態度」についても、一層意識して授業をしていくことが必要である。

評価については、2つの側面から考えていく。

- ① 道德の時間において、どの程度道德的実践力が高まっているか。
- ② 道德の時間において、どの程度自己評価を深めているか。

①については、どの程度、道德的価値に対して道德的実践力が培われているかを、心情、判断力、実践意欲や態度の3つの様相からみていく。

②については、児童が自分自身をどのように見つめ評価しているかによって分析していく。自分をどれだけ肯定的に前向きにとらえているか、自分自身をどれだけ客観的に見ることができたかをみていく。自己評価が深められれば、自己の生き方を見つめさせることができ、より行為につながっていくと考える。

また、評価に客観性をもたせるために、心理尺度を用いた統計学的な分析もしていく。

b 評価の方法

(a) 観察による方法

授業のねらいに即して、観察の視点を定めたチェックリストと自由記述欄を合わせた記録用紙を使って、児童のありのままを観察し、記録していく。

(b) 質問紙による方法

道德に関する実態・意識調査や授業前後の変容をみる調査により把握する。また、心理学的に尺度を用いて統計学的に分析する。

(c) ワークシートや日記等の記述による方法

児童に感じたことや考えたことを記述させ、共感的に把握する。自分を肯定的に、客観的にみる自己評価能力についても把握する。

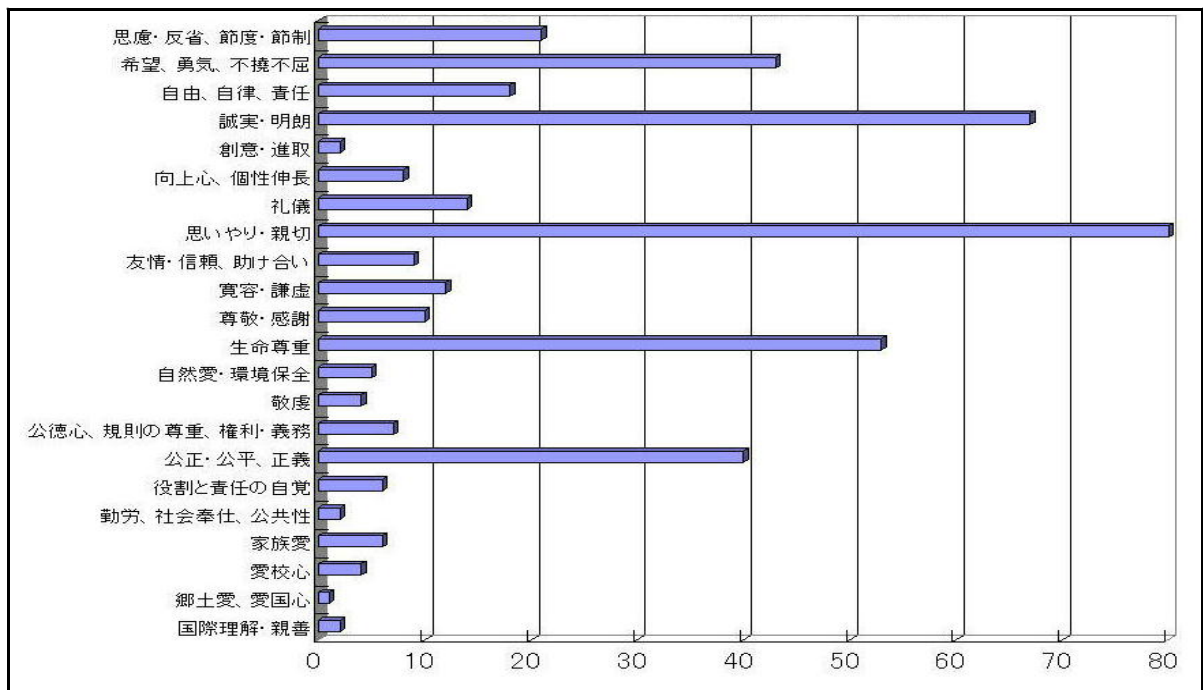
3 授業実践による検証の分析と考察

(1) 本研究で取り扱う内容項目

ア 保護者が育ってほしいと願う内容項目の調査

昨年度、保護者を対象に、育ってほしい内容項目を選択する形で調査を行い、結果を以下の資料8にまとめた。(アンケートの方法…育ってほしいと願う内容項目を3つ選択)

保護者が育ってほしいと願うのは、「思いやり・親切」「誠実・明朗」「生命尊重」が特に多く、次いで、「希望・勇気、不撓不屈」「公正・公平、正義」が多かった。保護者の願いは、内容項目の4つの視点すべてに関わっていることが分かる。特に多かった3つの内容項目については、志和池小学校において、本年度の重点指導事項として取り上げている。



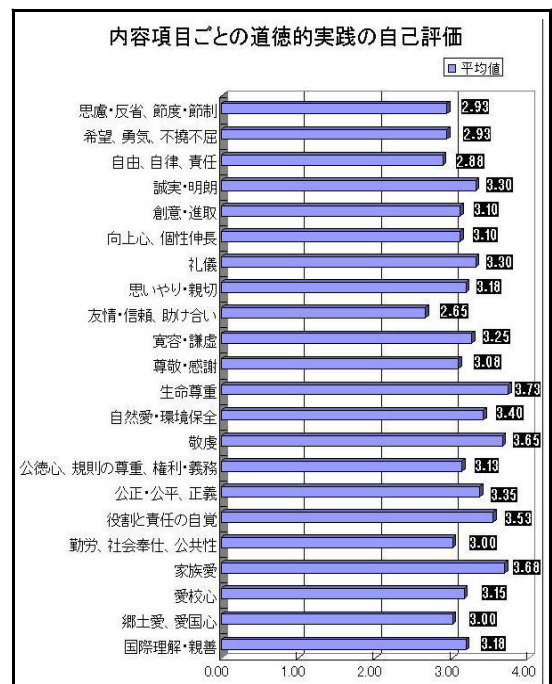
【資料8 保護者が育てほしいと願う内容項目】

イ 児童への内容項目ごとの道徳的実践に関する意識調査

児童の道徳的実践について、道徳の内容項目ごとに4段階で自己評価させた。(資料9)

児童の自己評価は、「生命尊重」「家族愛」「敬虔」「役割の責任と自覚」について高い結果が出た。逆に、低かったのは、「思慮・反省・節度・節制」「希望・勇気・不撓不屈」「自由・自律・責任」である。「友情・信頼・助け合い」が最も低かったが、これは質問内容に「男女仲良く」という記述があり、これに児童が敏感に反応したためである。

結果から考察すると、自分自身に関することや他の人とのかかわりに関することについて低いことから、児童は自分自身の基本的生活習慣や人間関係を調整することに自信がないと感じていることが推察される。自然や崇高なもの、集団や社会とのかかわりに関することについては、自己評価は高い結果が出ているが、現実感を感じていないのではないかと推察される。



【資料9 道徳的実践の自己評価】

ウ 本研究で取り扱う内容項目

保護者が最も育てほしいと願う内容項目は、「思いやり・親切」であり、学校でも重点として取り上げている。児童の道徳的実践の意識の低い内容項目はいくつかあるが、児童の実態から考えると、本研究では、保護者の願いが最も高い「思いやり・親切」に焦点を当てて研究を進めていくこととする。

(2) 第1回検証授業 (志和池小学校第6学年 平成22年7月9日実施)

ア 授業の実践

先に述べた手立ての「体験や体験活動を生かす工夫」「問題意識をもたせる導入や資料提示の工夫」「児童の心を揺さぶる発問構成の工夫」「自己の生き方を見つめさせる展開後段の工夫」が、道徳的価値を自覚させ、実践意欲を高めていくことに有効かどうかを検証するための授業を実施した。

1 主題名 相手のことを考えて

2 ねらいと資料

- だれに対しても思いやりの心を持ち、相手の立場に立って親切にしようとする態度を育てる。
(資料名「タクシー乗り場で」 旧文溪堂)

3 学習指導過程

段階	学習内容及び活動	主な発問・指示	具体的な手立てと主な児童の反応
気 付 く 4 分	1 マザーテレサの本を見る。 2 めあてを立てる。 親切について考えよう。	○ この本には、みなさんが国語で学習した『マザー・テレサ』のことが書かれています。マザー・テレサはどんなことをしましたか。 ○ マザー・テレサの言葉にこんな言葉があります。 ○ 今日は、「親切」について考えていきましょう。	・死を待つ人の家や孤児の家を作った。 ・困っている人を助けた。 国語で学習したマザー・テレサの言葉や行動から、「親切」について想起させ、意識を高めた。 体験を生かす工夫 問題意識をもたせる導入の工夫
高 め る 22 分	3 資料を読み、新吉さんの気持ちを中心に話し合う。 (1) 資料「タクシー乗り場で」を読み心に残ったことを発表する。 (2) タクシーに乗ることになった新吉さんの気持ちを考える。 (3) 雨の中、女の人が出てきたときの新吉さんの気持ちを考える。 (4) 雨の中、タクシー乗り場で待とうとしている女の人を見てどうしようか迷う新吉さんの気持ちを考える。 (5) タクシーを待つ列が5、6人と増えてきたときの新吉さんの気持ちを	○ 今日の話は、雨の日にタクシー乗り場でタクシーを待っているときの話です。この話には、70歳になる新吉さんと両手に大きな買い物袋を持った女の人が出てきます。 ○ どの場面が心に残りましたか。 ○ タクシーに乗ることを決めた新吉さんはどんな気持ちだったでしょう。 ○ 雨の中、パン屋の軒下から女の人が出てきたとき、新吉さんはどんなことを考えたでしょう。 ◎ このままだと女の方は雨にぬれたままタクシー乗り場で待つことになります。それを見て新吉さんはどんなことを考えたでしょう。ワークシートに書いてください。 書いたことをもとに、先生と劇をして考えてみましょう。 ○ タクシーを待つ列が、5、6人と増えていったとき、新吉さんはどんなことを考えていたでしょう。	・場面絵や荷物の袋を示しながら、あらすじや状況を説明し、短時間で把握させてから読み聞かせをした。 問題意識をもたせる資料提示の工夫 ・後ろの人に訳を説明している場面 ・20分も歩いて帰るのがいやだな。 ・早く帰りたい。 ・タクシーの方が楽だな。 ・荷物が重くないかな。 ・何とかしてあげよう。 歩いて帰るのが面倒で、誰も乗り場に並んでいなかったのがタクシーに乗ろうと思ったことをしっかり押さえて、決意に至った新吉さんの気持ちの揺れを深く考えさせる発問構成にした。 心を揺さぶる発問構成の工夫 役割演技をさせ、新吉さんの心の揺れを体験したり、演技を見て感じたことを発表したりして、新吉さんの気持ちを考えさせた。 体験活動を生かす工夫 (役割演技) ・大丈夫ですか。私が代わりに待っていますから。 (発表) ・雨の中、大丈夫かな。 ・先に行かせよう。 ・パン屋のところで待っていてください。 ・他の人たちも待ってるのにどうしよう。 ・この人たちを説得しよう。

	考える。		
見 つ め る 16 分	4 これまでの生活を振り返り、親切にした経験を話し合う。 (1) これまでの生活を振り返り、親切にした経験や親切にされた経験を書く。 (2) 小グループで話し合う。 (3) 話し合いを通して考えたことを書く。 (4) 全体で話し合う。	○ これまでの生活を振り返って、今までに親切にしたことや親切にされたことを書きましょう。そのときの理由や気持ちも書きましょう。 ○ 書いたことを発表しましょう。発表を聞いて質問や意見感想を出し合いましょう。 ○ グループの話し合いで出された感想や意見を聞いて、もう一度自分を振り返って、感じたことを書きましょう。	・お店のレジで、後ろの方に赤ちゃんを抱っこして重たそうに買い物かごを持った人がいたので、大丈夫かなと思って、レジの順番をゆずった。そうしたら、ありがとうと言ってくれたのでうれしかった。 自分の生活経験を振り返らせながら書かせ、それを基に小グループで話し合いをさせた。感想や質問、意見を交流することにより、親切についての考えや実践意欲につながる記述が見られることをねらった。 体験を生かす工夫 自己の生き方を見つめさせるための展開後段の工夫 ・みんな知らない人にも親切にしていた。
あ た た め る 3 分	5 教師の説話を聞く。	《教師の説話の内容》 朝の公民館の掃除で、近くに住むおばあさんが「いつもありがとうございます。おかげさまでいつもきれいです。」と言いました。そう言われて、心があたたかくなった気がしました。 母は、「おかげさま」は「親切にしてくれてありがとう」ということ、もう一つ似ている言葉で「おたがいさま」があって、「みんなで助け合いましょう」ということなんだよと話してくれました。	

イ 授業の分析と考察

(7) 体験や体験活動を生かす工夫

導入では、5年生の国語科で学習したマザー・テレサの伝記を提示して、「どんなことをした人か」という発問をした。「孤児の家を作った」「貧しい人は神様」などの児童の発言が次々にあったことから、マザー・テレサの学習を想起させることができた。その後、資料10のようなマザー・テレサの親切に関する言葉を紹介したところ、教師の話す言葉にじっと耳を傾けている姿が見られた。このことから、伝記に加え、マザー・テレサの言葉を紹介したことは、本時でねらう「思いやり・親切」についての意識を高めることができたと考える。さらに、親切についての体験を想起させることにつながるだけでなく、国語科との関連も図ることができた。

親切で慈しみ深くありなさい。あなたに出会った人が誰でも前よりもっと気持ちよく、明るくなって帰るようになさい。
親切があなたの表情に、まなざしに、ほほえみに温かくかける言葉にあらわれるように。

【資料10 マザー・テレサの言葉の一部】

展開前段の役割演技は、主人公の新吉さんの心の揺れを考えさせ共感させることともに、行為につながることをねらったが、日常生活での体験と照らし合わせることで難しかったのか児童の発言が広がらず、十分に効果を上げることができなかった。役割演技も含め、各段階における体験や体験活動を生かす工夫について検討する必要があると考えた。

(4) 問題意識をもたせる導入や資料提示の工夫

資料提示のときの折りたたみ傘や大きな荷物などの実物提示、「大粒の雨」の効果音は、場面の状況やその行為の困難性を実感させるために設定した。場面絵を黒板に掲示し、実物や効果音の提示後、読み物資料を範読したところ、児童は場面絵や大きな荷物を見ながら、じっと聞き入っていた。提示したものをもとに、資料の場面を想像していたと思われる。このように視覚的・聴覚的に提示することは、資料の場面の臨場感を高め、資料の内容に浸ら

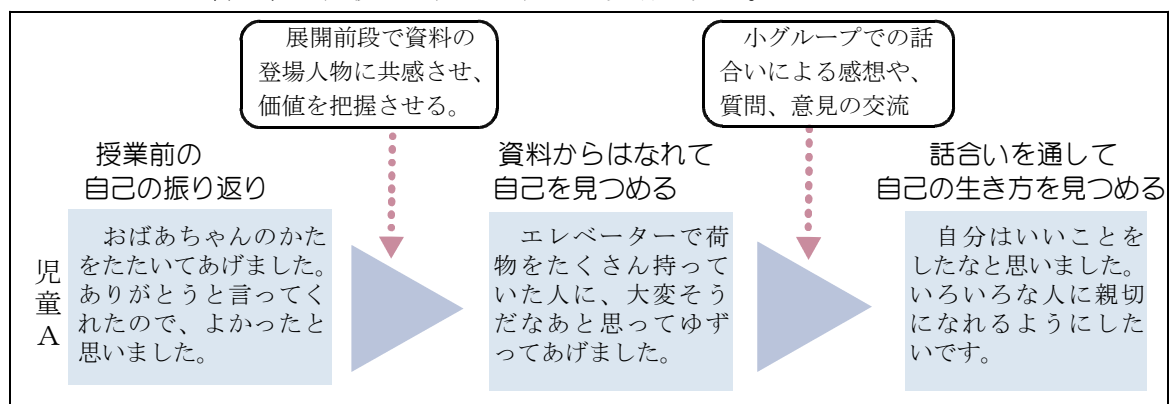
せるのに効果的だったと考える。

(ウ) 心を揺さぶる発問構成の工夫

主人公の心の揺れを実感させるために、「タクシーに乗ることを決めた新吉さんは、どんな気持ちだったか」と発問した。「20分も歩いて帰るのは嫌だな。」「早く帰りたい。」という児童の反応があり、タクシーに並んだときの新吉さんの気持ちをおさえることができた。これにより中心発問の「女の人の方までタクシーを待とう」という、決意するまでの主人公の心の揺れを考えさせることができたと考える。しかし、中心発問について、書く活動と役割演技を盛り込んだことは、児童の思考の流れと少しずれがあり、考えをうまく出せない児童もいた。児童の思考の流れをさらに分析した発問構成を練り上げていく必要があった。

(I) 自己の生き方を見つめさせるための展開後段の工夫

自己を見つめ、さらに、自己の生き方を見つめられたかどうかをみるために、授業前の自己の振り返りも含め、展開後段の児童の記述の変容を見た。



【資料11 授業前の自己の振り返りを含めた展開後段の児童の記述の変容の一部】

資料11を見ると、児童Aの記述は、授業前は友だちや家族など身近な人に対して親切にされたことや親切にしたことを書いているが、展開後段の自己を見つめる活動では、知らない人への親切に児童の視点に移っている。さらに、小グループでの話し合いの後には、親切という価値についての自分なりの考えや実践意欲と思われる記述が見られる。展開前段での資料を通して把握した道徳的価値が自己を見つめる視点となり、自己を見つめることにより考えが広がり、さらに、話し合いを通して、道徳的価値を深く自覚したものとする。

しかし、グループによっては、話し合いがスムーズに進まないグループもあった。話し合いのルールについてマニュアル化したものを提示したり、展開後段で話し合いをすることを児童に意識付けて習慣化させたりするなどの工夫が必要である。話し合いの後、自己の生き方を見つめさせる際には、自分なりの言葉でこれからの自己の在り方や目標を意識している姿が表れるように展開後段の流れを児童に意識させる必要がある。

ウ 第2回検証授業で改善すべき点

第1回検証授業の分析と考察を受け、第2回検証授業への改善点をまとめた。

- 各段階における体験や体験活動を生かす工夫
- 児童の思考の流れに沿った、より効果的な書く活動や発問構成の工夫
- 展開後段の基本的な流れの定着と小グループでの話し合いの工夫

(3) 第2回検証授業 (志和池小学校第6学年 平成22年10月20日実施)

ア 授業の実際

第1回検証授業で明らかになった改善点を受け、「体験や体験活動を各段階に取り入れていくこと」「児童の思考の流れを分析した発問構成に練り上げること」「展開後段の流れを定着を図ること」の工夫が、道徳的価値を自覚させ、実践意欲を高めていくことに有効かどうかを検証するための第2回検証授業を実施した。

1 主題名 人の真心			
2 ねらいと資料			
○ 相手のことを考えて思いやりの心を持ち、相手の立場に立って接しようとする心情を育てる。 (資料名「雪のぼうし」 学研)			
3 学習指導過程			
段階	学習内容及び活動	主な発問	具体的な手立て
気 付 く 4分	1 学級活動の授業で作った実践のめあてを出し合う。 2 めあてを立てる。 思いやりについて考えよう。	○ 学級活動の授業で実践のめあてを決めました。どんな実践のめあてを決めましたか。 ○ 今日は、「思いやり」について考えていきましょう。	自分たちで作った「実践のめあて」を想起させ、既習の学級活動の題材「相手の立場」の学習をふり返らせ、ねらいとする価値への方向付けをする。 体験を生かす工夫 問題意識をもたせる導入の工夫
高 め る 20分	3 資料を読み、淳子の気持ちを中心に話し合う。 (1) 資料「雪のぼうし」を読み、心に残ったことを発表する。 (2) 俊にプレゼントが一番小さかったと言われた淳子の気持ちを考える。 (3) 雪色のぼうしが送られてきたときの淳子の気持ちを考える。 (4) 雪色のぼうしにこめられた、俊の思いを考える。	○ どの場面が心に残りましたか。 ○ 「プレゼントは前のが一番小さい。」と言われたとき、淳子はどんな気持ちだったでしょう。 ○ 雪色のぼうしが送られてきたとき、淳子はどんな気持ちになったでしょう。 ◎ 雪色のぼうしには、俊のどんな思いがこめられているでしょう。	資料を読む前に、資料のあらすじや雪国の様子、場面絵を、実物投影機を使って提示する。 問題意識をもたせる資料提示の工夫 俊のためにと心をこめて作った淳子の気持ちに共感できるように、小さな折り紙で作った鶴を準備し、作るのが大変なことに気付かせる。 体験を生かす工夫 雪かきが大変な仕事であることを、写真を提示してイメージさせ、淳子と俊のそれぞれの思いを考えさせる発問構成にする。 心を揺さぶる発問構成の工夫 中心発問は、書く活動を取り入れて、書きながら自分の考えを整理させるしていく。それにより、自信をもって発表できるようにする。 思いを伝え合う話合いの工夫
見 つ め る 18分	4 これまでの生活を振り返り、思いやりを受けた経験を話し合う。 (1) これまでの生活を振り返り、思いやりのある行為をしたりされたりした経験を書く。 (2) 小グループで話し合う。 (3) 話合いを通して考えたことを書く。 (4) 全体で発表し合う。	○ これまでの生活を振り返って、思いやりのある行いをしたりされたりしたことを書きましょう。そのときの気持ちも書きましょう。 ○ 書いたことを発表しましょう。発表を聞いて質問や感想意見を出し合いましょう。 ○ 自分を見つめる話合いを通して、感じたことを書きましょう。 ○ 書いたことを発表してください。	自分を見つめた経験を書いて整理させる。書けない児童には、事前のアンケートを想起させる。 体験を生かす工夫 小グループで感想や意見、質問の交流を行わせ、自分とはちがう考えにもふれさせる。 自己の生き方を見つめさせるための展開後段の工夫 話合いの後、自己を再度見つめさせ、「思いやり」についての考えをまとめ、価値の主體的自覚を図る。 自己の生き方を見つめさせるための展開後段の工夫

あたためる 3分	5 校長先生の話 を聞く。	○ 校長先生の話を開 いて下さい。	校長に、学校生活の中で感じられた児童の思 いやりのある行為を話してもらい、児童一人一 人の実践意欲を高めていく。 実践意欲を高める説話等の工夫
-------------	------------------	----------------------	---

イ 授業の分析と考察

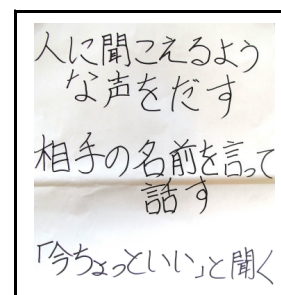
(ア) 体験や体験活動を生かす工夫

展開前段では、以前作った体験を想起させるために、プレゼントの箱を準備し、それを開けて、実際に作った折り鶴を見せた。児童は驚きの声を上げ、じっと見入っていた。プレゼントの包装を解いて、箱に詰まった折り鶴を見せたことは、主人公の「時間をかけていっしょうけんめい作ったのに」という気持ちに共感させるのに効果的だったと考える。

展開後段の自己を見つめるときに、経験をなかなか思い出せない児童には事前のアンケートで書いたことや教師が知る児童の様子について知らせた。その後、児童はワークシートに自分の考えを記述していた。児童の実態に応じて、自分の生き方を見つめることの支援をすることができた。

(イ) 問題意識をもたせる導入や資料提示の工夫

導入では、学級活動の時に児童全員で考えた「実践のめあて」を提示した。このめあては、学級活動で「相手の立場」を題材に授業を行ったときに、相手の立場を考えて話すための方法として、グループごとに児童が話し合って決めたものである。相手の立場を考えることは、「思いやり」に通じるものがあり、本時で考える「思いやり」への意識付けを図ることをねらったものである。児童は、実践のめあてをすぐに思い出し、うなずいている姿が見られた。「相手の立場」という題材は、本時の道徳の時間の内容との関連が深く、児童の思考も自然に流れたと思われる。



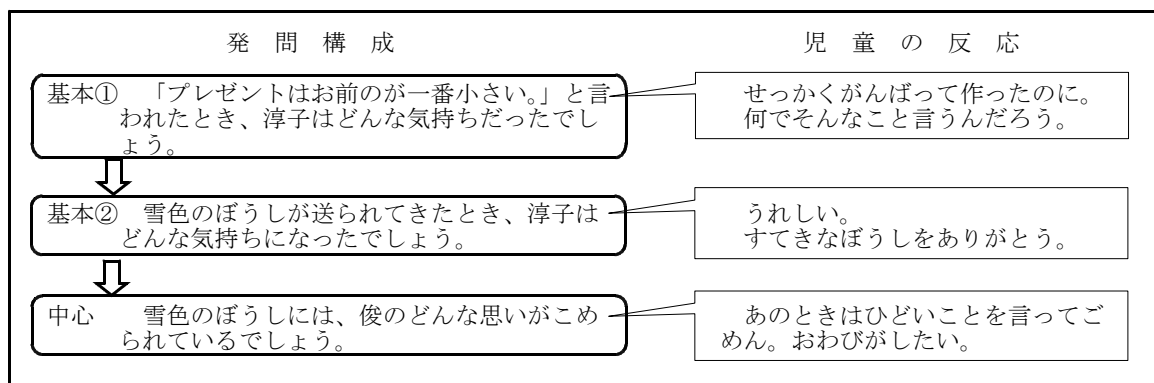
【資料12 実践のめあて】

資料提示の際は、資料を読む前にあらすじを紹介したり、実物投影機を使って大画面のテレビに場面絵や雪国の様子を映したりして提示した。児童は大画面を見慣れており、画面を見ながら教師の範読を聞いていた。資料の内容も大きく映し出せることや提示したままにできるという良さがああり、資料の内容をイメージさせるのに効果的だった。

(ウ) 心を揺さぶる発問構成の工夫

登場人物である淳子と俊のそれぞれの思いを考えさせることで、相手を思いやるとはどういうことかを考えさせたいと思い、資料13のような発問構成とした。児童が自我関与していく人物が変わると、道徳的価値の把握が難しいので、まずは淳子の気持ちを考えさせた。

基本発問①では、「お前のが一番小さいと言われたときの気持ち」を考えさせた。「心をこめて作ったのに」「プレゼントは大きさじゃない」という淳子の気持ちをおさえることができた。基本発問②では、雪色のぼうしをもらったときの気持ちを考えさせると、児童は俊に対するうれしさや感謝の気持ちを発言していた。しかし、これでは「思いやり」という道徳的価値の把握には至っていない。そこで、中心発問で、プレゼントを贈った俊のプレゼントにこめられた思いまで考えさせることをねらった。淳子と俊のそれぞれの思いを考えさせる発問構成は有効だった。



【資料13 発問構成と児童の反応】

(I) 思いを伝え合う話合いの工夫

登場人物の気持ちや思いを考えさせるために、ワークシートに自分の考えを書きながら整理させた。はじめから文章にするのではなく、考えたことをありのままに書き出させることは、自分の考えを整理するのに有効だった。全体的話合いでは、ワークシートに自分で整理した考えを基に、自分の言葉で発表する姿が見られた。このことは、自分の思いを伝えようとする話合いにつながったと考える。また、児童どうしで指名していく相互指名を取り入れたことにより、友だちの考えと比較して自分の考えを言う児童も増えてきた。書く活動と相互指名により、児童はお互いに思いを伝え合い、考えを深め合うことができた。

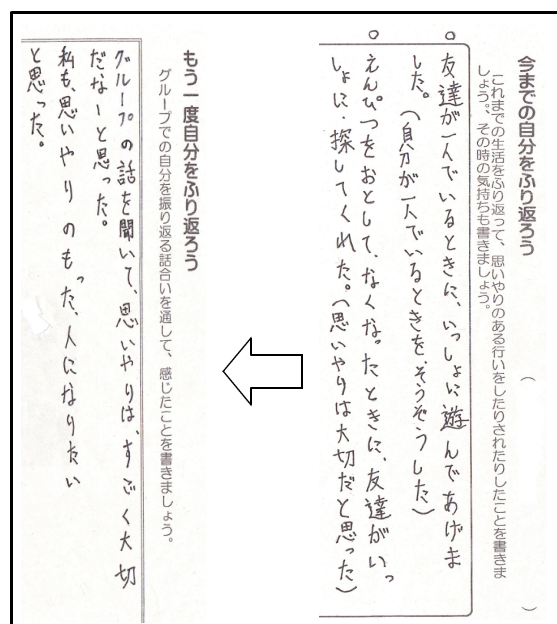


【資料14 児童の話合いの様子】

展開後段で、自分の経験について、行為と心情、判断理由を書かせて振り返らせた。資料15の児童のワークシートでは、友だちのことを記述し、そのときの気持ちについて書いていた。小グループでの話合いの後の記述には、友だちの意見をしっかり聞いて納得したことや、話合いを基にしたこれからの実践意欲も記述していた。このことから、グループでの話合いが有効に働いていることが分かった。今後も、展開後段に時間をかけ、自己の生き方を見つめさせることを継続的に行っていくことにより、自分なりの言葉で道徳的価値の自覚を深めたり、実践意欲を高めたりすることができるのではないかと考える。

(II) 自己の生き方を見つめさせるための展開後段の工夫

展開後段で、自分の経験について、行為と心情、判断理由を書かせて振り返らせた。資料15の児童のワークシートでは、友だちのことを記述し、そのときの気持ちについて書いていた。小グループでの話合いの後の記述には、友だちの意見をしっかり聞いて納得したことや、話合いを基にしたこれからの実践意欲も記述していた。このことから、グループでの話合いが有効に働いていることが分かった。今後も、展開後段に時間をかけ、自己の生き方を見つめさせることを継続的に行っていくことにより、自分なりの言葉で道徳的価値の自覚を深めたり、実践意欲を高めたりすることができるのではないかと考える。



【資料15 展開後段の児童の記述例】

(4) 第1回検証授業と第2回検証授業を比較した児童の変容の分析と考察

ア 観察による評価

授業のねらいに即して「思いやり・親切」についての観察の視点を資料16のように決め、記述欄と併用して観察による評価を行った。第1回検証授業の観察の記録では、授業への取組や実践意欲がもう少しだったことを受け、授業前に、ボランティア等をがんばっている様子について賞賛

道徳的心情	道徳的判断力	道徳の実践意欲と態度	記述欄
相手のことを思いやり親切にすることを喜んでいたりできなかったことを悔やんだりなどして、相手のことを思いやり、親切にすることの大切さを感じ取っているか。	相手のことを思いやり親切にすることがよいことであると判断し、状況に応じて、相手の思いやり、親切にすることはどうかを判断できているか。	相手を思いやり親切にする喜びを感じながら、状況に応じて判断し、適切な行動をとろうとする意志や身構えがあるか。	
7月	◎	○	読み物資料では、主人公の気持ちを考えて記述しているが、自己を見つめることがもう少しである。思いやり・親切についての自分なりの考えや実践意欲の記述や発言もない。
10月	◎	○	登場人物の考えを多く記述し、発表もした。生活を振り返って自己を見つめた記述が多くあった。話し合いの後の記述からも、思いやり・親切について考えたことが分かった。

【資料16 観察による評価一覧表の一部】

した。その後の第2回検証授業後の児童のワークシートの記述や発表等、授業の様子には、実践意欲につながる記述や発表もあった。教師の観察による記録を次の授業に生かすことができたと考える。

イ 記述による評価

どちらの検証授業も、展開後段において小グループでの話し合いにより、友だちの感想や質問、意見にふれ、自己の生き方を見つめさせるようにした。話し合いの後、再度自分を振り返る際に、「思いやり・親切」についての児童の記述がどのように変容したかを見た。

第2回検証授業 (思いやり)	第1回検証授業 (親切)
もう一度自分を振り返ろう グループでの自分を振り返る話し合いを通して、感じたことを書きましよう。 田んぼやうさぎのうさぎを喜ばせたりはがましたり人々を幸せにしたりするものだなと思ひました	もう一度自分を振り返ろう 自分を振り返る話し合いを通して、感じたことを書きましよう。 いろいろな親切があつてすごいなあと思ひました

【資料17 記述の変容 (児童B)】

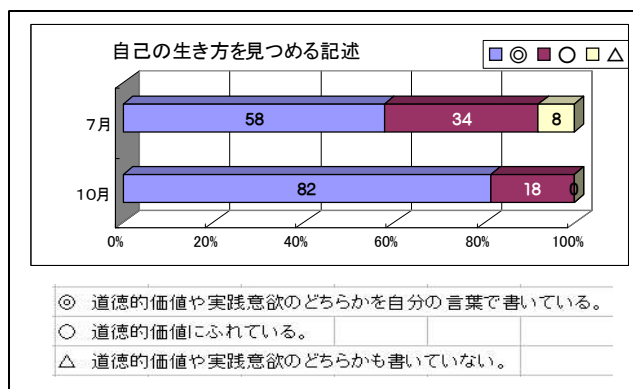
第2回検証授業 (思いやり)	第1回検証授業 (親切)
もう一度自分を振り返ろう グループでの自分を振り返る話し合いを通して、感じたことを書きましよう。 人のことを思いやりをするとは、大それた事とは思ひました。ほかに、人にやさしくして、思いやりを持って行動したいなと思ひました。	もう一度自分を振り返ろう 自分を振り返る話し合いを通して、感じたことを書きましよう。 いろいろな友達かいて、うれしい気持ちがいっぱい伝わってきました。やさしい人かいると、私も楽しくなりました。

【資料18 記述の変容 (児童C)】

資料17を見ると、児童Bの記述は、第1回検証授業では、「すごい」という漠然としたものであったが、第2回検証授業では、「思いやりというのは人を喜ばせたり励ましたり人を幸せにしたりするもの」のような自分なりの考えを書いていた。また、資料18では、児童C

の記述は、自分の経験についての気持ちに、グループの友だちが共感的な意見を出してくれたことが書いてあり、第2回検証授業では、「思いやり」や「親切」についての自分なりの考えや実践意欲と思われる記述も見られた。

また、道徳的価値についての自分なりの考えや実践意欲につながる記述の本学級の傾向について資料19に示す。7月の検証授業では約6割の児童が、自分の言葉で書いていたが、10月の検証授業で



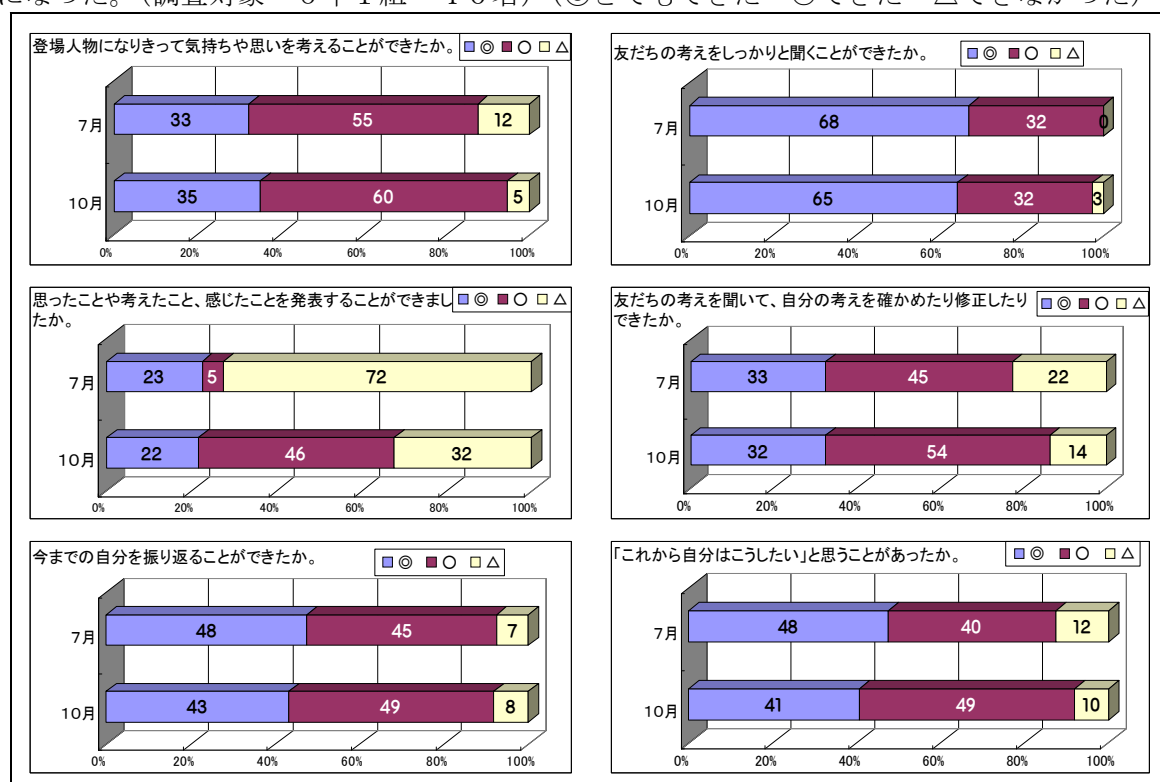
【資料19 学級の自己の生き方を見つめる記述】は約8割に増えていたことから、全体的な傾向として、道徳的価値や実践意欲を自分の言葉でまとめる、記述の変容が見られたといえる。

展開後段での小グループでの話し合いは、自分の経験を振り返るだけでなく、価値を実感できたり実践意欲が高まったりすることにつながるということが分かった。話し合いを通して再度自己の生き方を見つめさせることは有効であったことが検証できた。このような学習を繰り返すことにより、これからの自分の生き方について深く見つめるための、自己を客観的に見る目も育てていくことが大切だと考える。

ウ 質問紙による評価

(7) 授業後の自己評価

授業後に、授業への取組について3段階で自己評価をさせたところ、資料20のような結果になった。(調査対象 6年1組 40名) (◎とてもできた ○できた △できなかった)



【資料20 授業後の自己評価 (7月と10月の比較)】

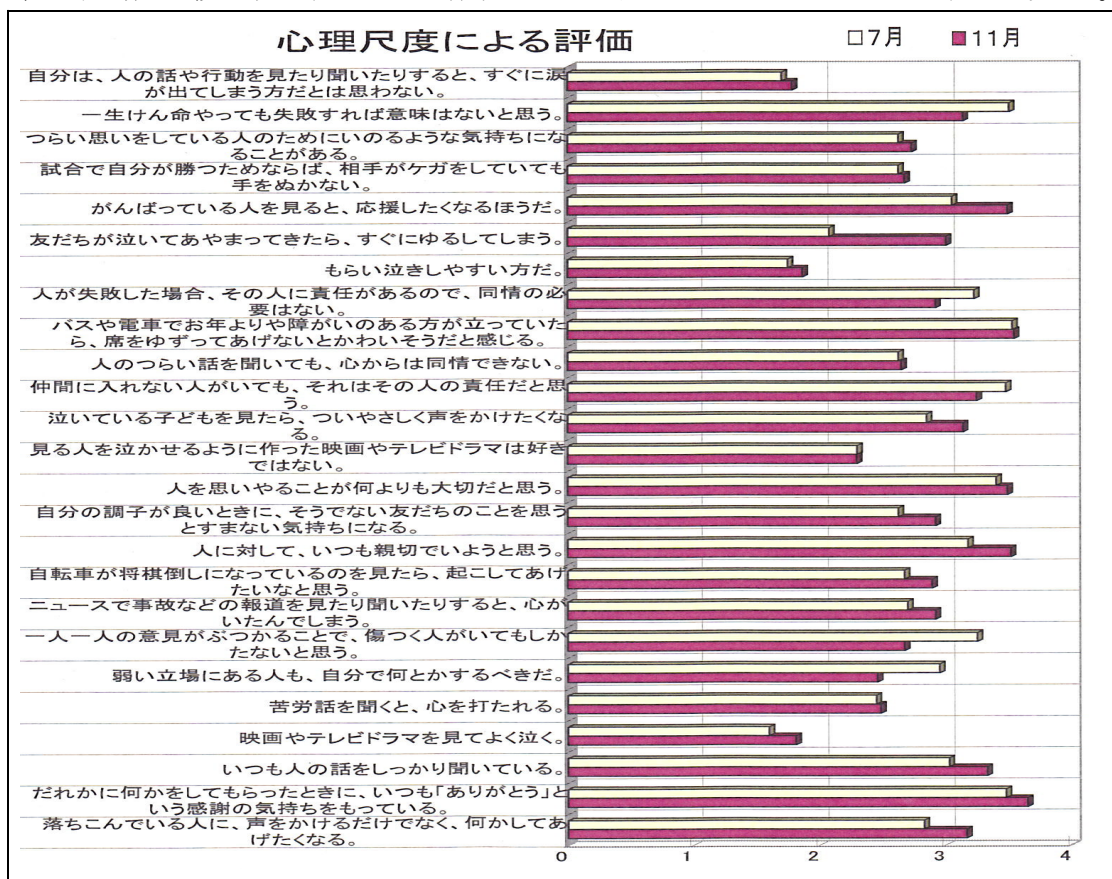
結果を分析すると、全体的に、「とてもできた」「できた」と答えた児童が増えてきた。

特に、前回低かった「発表」については、大きく伸びており、全体またはグループでの話し合いに積極的に参加できる雰囲気ができつつあると推察できる。また、「話し合いによる考えの確認や修正」「自己の振り返り」「実践意欲」は、80%を超える結果が出ており、アンケートの結果が自己の生き方を見つめることにも表れていると考える。

(4) 心理尺度による評価

道徳的実践力が高まったかどうかを、授業後に、心理尺度を用いた質問紙を用い、4段階で自己評価をさせた。様々な場面において、「思いやり・親切」がどう表れてくるかをみるために行った。(質問項目については、京都大学 内田由紀子・北山忍氏の『思いやり尺度の作成と妥当性の検討』を参考にした。)

資料21の結果を分析すると、全体的に、7月に比べ11月の平均値が伸びていることから、「思いやり・親切」という道徳的価値の内面的自覚が少しずつ深まってきたと考えている。平均値が下がっているものもあるが、これは友だち関係における心の葛藤によるものだと考えられる。発達の段階において、児童一人一人の考え方や行為も様々である。道徳の時間の指導と各教科等や日常生活とを関連させた指導の継続により、望ましい行為(道徳的行為)に移そうとすることを体験的に身に付けさせていくことが必要だと考える。



【資料21 心理尺度による評価（7月と11月の比較）】

また、今回用いた質問紙によるデータを因子分析してみた。

因子分析とは、複雑な統計資料を少数の要因に分解し、その要因間の関係や変動に着目して全体的特徴を理解しようとする統計上の技法である。

因子分析したものを数値が0.5以上のものに着目して整理し、因子1のグループは「人のために何かしようとする傾向性」、因子2のグループは「相手の立場」、因子3のグル

ープは「共感」とした。

		因子1 (傾向性)	因子2 (相手の立場)	因子3 (共感)	共通性
5	がんばっている人を見ると、応援したくなるほうだ。	0.729	0.096	0.338	0.656
9	バスや電車でお年よりや障がいのある方が立っていたら、席をゆずってあげないとかわいそうだと感じる。	0.683	-0.164	-0.023	0.493
12	泣いている子どもを見たら、ついやさしく声をかけたくなる。	0.794	0.045	0.109	0.645
15	自分の調子が良いときに、そうでない友だちのことを思うとすまない気持ちになる。	0.506	0.063	-0.283	0.340
17	自転車が倒壊しているのを見たら、起こしてあげたいと思う。	0.723	0.082	0.058	0.533
18	ニュースで事故などの報道を見たり聞いたりすると、心がいたんと思う。	0.661	0.155	0.135	0.479
24	だれかに何かをしてもらったときに、いつも「ありがとう」という感謝の気持ちをもっている。	0.550	0.167	0.135	0.349
25	落ちこんでいる人に、声をかけるだけでなく、何かしてあげたくなる。	0.790	0.014	0.042	0.626
2	一生けん命やっても失敗すれば意味はないと思う。	0.026	0.803	0.146	0.667
8	人が失敗した場合、その人に責任があるので、同情の必要はない。	0.031	0.869	0.035	0.758
11	仲間に入れない人がいても、それはその人の責任だと思う。	0.004	0.823	0.091	0.686
19	一人一人の意見がぶつかることで、傷つく人がいてもしかたないと思う。	0.086	0.693	0.086	0.495
20	弱い立場にある人も、自分で何とかするべきだ。	0.172	0.530	-0.369	0.447
7	もらい泣きしやすい方だ。	-0.020	0.010	0.560	0.314
22	映画やテレビドラマを見てよく泣く。	0.128	0.014	0.581	0.355

【資料22 因子分析の結果】

資料22は、質問項目がどの因子と関係が深いかを示したものである。資料15で第1回検証授業より第2回検証授業の方が下がった項目は、資料17に示す因子2によるものと一致する。つまり、本学級の児童は、「相手の立場」についてもっと深く考えさせることを重点的に指導していくことが必要であると考察した。

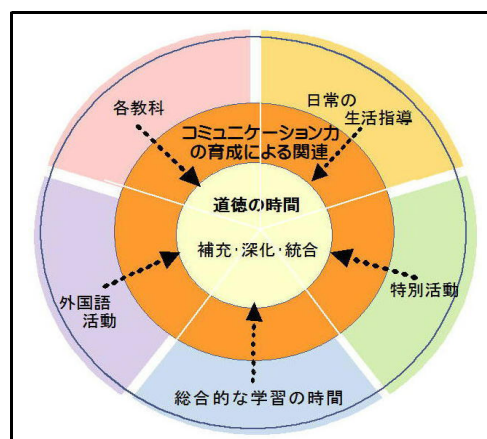
4 各教科等との関連

道徳教育は、教育活動全体を通して行われるものである。各教科等の学習活動や日常生活指導と道徳の時間との関連を図っていくことで、実践につながるものになると考える。(資料23)

資料24の写真は、6年生児童が1年生児童に牛乳パックの片づけのしかたを教えているところである。日常のこのような場面の中の、児童が主体的に実践していく機会にしっかり目を向けていくことが大切だと考える。

道徳の時間においては、本研究で示したように、各教科等の学習内容や学習態度について、補充・深化・統合して指導していった。道徳的实践の場である特別活動においては、よりよい生き方についての考えを深めたり人間関係を築いたりなど、双方向で有機的な関連を図れることを、意図的・計画的に指導をしていく。

また、内容に関わる関連だけでなく、人と人とのつながり、いわゆるコミュニケーション力を教育活動全体で培っていくことが、道徳的価値の自覚を深め、道徳的実践力を育成することにつながる。道徳の時間はもちろん、各教科等の学習活動や日常生活において、人と関わるコミュニケーション力を育成する全体やグループでの話合いの機会や場を意図的、計画的に設定していくことが、主体的に実践していくために必要だと考える。今後、各教科等で道徳教育を意識しながら学習を進めていきたい。



【資料23 道徳の時間と、各教科等や日常生活指導との関連】



【資料24 道徳的実践の一例】

5 家庭との連携

児童が主体的に実践していこうとするためには、家庭との連携が必要である。学校と家庭との連携を図ることで道徳的实践が習慣化され、日常化される。その取組として、道徳通信を発行した。(資料25) 学校からの発信だけでなく、家庭からも児童の様子や意見を聞きながら進めていくことが、より実践につながると考える。家庭との連携を今後さらに大切にしていきたい。



【資料25 道徳通信「こころ」の一部】

III 研究の成果と課題

1 成果

- 道徳的实践につながる道徳の時間の指導の工夫や、実践に移すための過程の仕組み、各教科等との関連について整理したことにより、道徳の時間だけでなく、他教科等や日常生活指導での改善点について明らかにすることができた。
- 体験や体験活動を生かす工夫を取り入れたことにより、児童が授業の様々な場面で自分を振り返ることができ、展開後段の自己の生き方を深く見つめることにつながった。
- 展開後段に、自己を見つめ、小グループでの話し合いを通して、再度自己の生き方を見つめる流れを位置付けたことにより、児童は友だちとのコミュニケーションを深め、実践に向けての考え方や意欲を表すことができるようになってきた。
- 観察や記述に加え、心理尺度による評価を用いたことにより、児童の変容について、より客観性のある評価をすることができた。

2 課題

- 道徳的实践力をさらに高めるために、児童一人一人がもっている道徳的価値やそれまでの体験等の実態を詳細に把握する方法を研究する必要がある。
- 児童の実態に応じて、実践につながる道徳教育のための、年間を通した指導計画の改訂が必要である。

《参考文献》

文部科学省	(2008.3)	「小学校学習指導要領」	東洋館出版
文部科学省	(2008.8)	「小学校学習指導要領解説道徳編」	東洋館出版
瀬戸 真 編著	(1986.11)	「道徳的体験と行為」	教育開発研究所
横山 利弘 著	(2007.7)	「道徳教育とは何だろうか」	暁教育図書
鎌原 雅彦 編著	(2008.8)	「心理学マニュアル質問紙法」	北大路書房
文溪堂編集部 編	(2010.7)	「道徳と特別活動」	ぶんけい
内田由紀子・北山忍	(2001.10)	「思いやり尺度の作成と妥当性の検討」	日本心理学会

《研究実践学校》 都城市立志和池小学校